心に残る一冊を持とう
―六年生「海のいのち」の実践から―

神奈川県川崎市立日吉小学校
坂本　正治

読んで語り合うことの喜びを

自分の思いを表現させるためには、「何を」に当たる部分に必要感、つまり「伝えたい」という思いがなければいけないのは言うまでもない。しかも、「何を」に当たる部分が軽薄なものではなく、自分の心を揺さぶられるような体験や経験が裏打ちされるものであればあるほど、表現の仕方にも工夫が生まれてくるはずである。

本単元では、「海のいのち」（立松和平 著・伊勢英子 絵・ポプラ社）という作品に出会うことがこの「何を」に当たるのである。主人公太一の成長ぶりや自然との共生といった作品の主題に迫る読みの経験は、読者である子どもの心を揺さぶり、心を伴った言葉の交わし合い、つまり伝え合いの活動を活性化させると考えた。言い換えれば、「海のいのち」の作品価値に迫るような読みの経験を十分にさせることで、伝え合う力を育もうと本単元

「空白の数十秒」に迫るために（学習指導計画）

初発の感想

個々の疑問

＊各自が持った疑問も尊重する。

共通課題（読みの視点）
「太一がクエを殺さなかった（殺せなかった）わけ」―空白の数十秒間の意味―

自力読み

・太一の家族が、海に対してどんな思いをもっているかを、太一の家族になりきり、一人称で書く。
（おとう、与吉じいさ、お母）
・個々の疑問の解決。

友達と交換

・お互いの書き方、着目点を交流し、次時に生かす。

教師との紙面対話

・個々の読みの状況を把握し、必要に応じて読みの方向付けをする。

代表者の対話

・読み深めや読みを広げる参考にする。

全体交流

・クエと遭遇したことをきっかけに、一人の漁師となっていった太一の心情の変化を読み、交流する。

対話

・全体交流に入る前に、代表者による対話を全員で聞いた。対話の話題をきっかけに交流させたことで、自分の考えとの相違点を積極的に発言させられた。

全体交流

を設定した。

子どもの読みを支えたもの

①確かな「読みの課題」

近年、「自分の気に入ったところを詳しく読む。」といった傾向の学習が多い。しかし、それで「本当に文学の価値を見出せるのだろうか。」また、「読むことの本質的な楽しさにふれられるだろうか。」そんな疑問を感じていた。そこで、子どもたちの疑問とは別に、ある程度教師からおろす形で、「空白の数十秒」という作品のクライマックスを課題化し提示した。

「なぜ、太一はクエを殺さないのか。」ではなく、「この数十秒は、太一をどう変えさせたのか。」が重要であることの共通理解は、必然的に太一の心情の変化をつかもうとする子どもの意欲につながり、自力読みを支えていった。

②感想の読みまわし、教師との紙面対話

読書とは本来孤独な行為である。そこに楽しさはあるものの、ともすると独りよがりな読みに発展したり間違った理解に走ってしまったりする。ましてや、課題に沿った読書を展開させたいと願ったときは、自力読みにある程度の方向付けは必要である。

本単元では、感想を友達と交換し、自分の読みを深めたり広げたりすることに役立たせた。また、ワークシート上で、教師と紙面対話するようにした。そこでは教師も一人の読者として、子どもの読みについて交流するようにした。

③対話による前時のふり返り

次の場面の自力読みの前に、前時の感想交流を代表者の対話で行った。代表者は、対照的な考えをもった者を選び、聞き手に自分の考えと比べるきっかけとさせた。いろんな読みを認めながらも、着眼する点を絞らせたり広げさせたりすることにも有効で、新しい場面の自力読みをよりよいものにできた。

実践をふり返って

子どもたちに「作品の価値に迫るような読み」を経験させるためには、ある程度の詳細な読解も必要であると考えた。子どもたち一人一人が読みのめあてをもって読みを進めることは大事にするものの、作品の本質に迫る鍵である祖父や父の言葉や、太一がクエと遭遇する場面などは、指導をし、文章や行間をていねいに読みとっていくことが必要であることを改めて感じた。

意見交流の場面においては、対話活動を取り入れたことは、子どもたち同士の双方向的な話し合いを活発にさせることができた。今後も、そのような場を工夫するようにしていきたい。そして、話し手や聞き手に対して適切なふり返りをさせるとともに、個々に支援をし、「伝え合うこと」の必要性と楽しさを体得させていきたいと思う。

さかもと　まさはる　川崎市立小学校国語教育研究会会員。「確かな言葉の力をつける国語教室」という研究会のテーマを受け他校の実践支援をしている。